学び合う 語り継ぐために

震災9年 新しいつながり [下]

生活者の視点から東日本大震災の体験を伝える「語り部」たち。被災状況が異なる街々の語り部たちが手を取り合い、災害から得た教訓を国内外に語り継ごうとしている。

釘子 明氏（コーディネーター 陸前高田被災地語り部 くぎこ 麻代表）

全国から400人参加しシンポ ■ 高校生の紙芝居に感心 ■ 外国学生と交流 初めて話せた

「東京五輪に伴い三陸地域にも多くの観光客が訪れるだろう。私たち語り部は震災から学んだ教訓を、聞き手の心が震えるように伝えるべきだ」

2月下旬、宮城県南三陸町などで開かれた「全国被災地語り部シンポジウムin東北」で、岩手県陸前高田市の釘子明さん(61)が力説した＝写真＝。

震災から9年がたち、被災地を訪れる人は減少傾向にある。釘子さんは2015年度に地元で1万人以上を案内したが、19年度は600人弱。語り部の多くは60歳以上で、高齢化も進んでいるという。

シンポジウムには東日本大震災や阪神大震災の語り部ら400人以上が参加。多くの児童らが犠牲になった宮城県石巻市の大川小学校で児童の遺族が当時を振り返ったり、互いの被災体験を語ったりした。

震災時、釘子さんは陸前高田市の高台にある中学校に避難し、避難所を開設した。避難者の不安を取り除くために、住んでいる地区ごとに区画を分けた。飲み水確保のためにトイレの水を止め、ストーブが足りないので教室のカーテンを外して避難した人にくるまってもらった。

「避難所には備蓄品がなく、サバイバルだった」

ふだん映像を交えて体験を語る釘子さんは「自分の避難場所を知っていますか」と問いかけ、日頃の備えの大切さを訴え続けている。釘子さんが感心したのは、紙芝居で簡潔に被災体験を語った岩手県釜石市の高校生の語り部。「自分は語る時間が長いので、簡潔なまとめ方が参考になった。語る技術が向上すれば、聞く人も増えるはず」

◇

仙台市～青森県八戸市をつなぐ自動車専用道、復興道路が来年3月までに全線開通する。道路の近くには、国営の追悼・祈念施設、震災の被害や教訓を伝える施設が数多くある。

宮城県気仙沼市の語り部、橋本茂善さん(70)は「復興道路は観光客を呼ぶ希望の道。各地の語り部が連携し、被災地を巡るツアーが実現すれば、街ごとに異なる教訓を学べるようになるはず」と期待する。

復興庁は昨年12月、アジアや欧米などから外国人有識者らを招き、各地の震災伝承施設などを巡って語り部の話を聞くツアーを実施。参加者たちは「話を聞くと震災をイメージしやすい」と、好意的だった。

気仙沼市の語り部、佐藤誠悦さん(67)は「海外の人を受け入れることは被災者にとっていいこともある」と語る。昨年、海外の学生と被災者が交流する機会があった。これまで家族を亡くした経験を語ることがなかった70代男性が、学生と世間話をするうち、「あの時ああすればよかったな」とこぼし、せきを切ったように話し始めた。

「周囲には打ち明けられなかった思いを、海外の学生に初めて話すことができた。知らない人にだからこそ、話せることもあるのだとわかった」

シンポジウム実行委員の神戸大学地域連携推進室学術研究員の山地久美子さんは、高齢男性が多い語り部を女性や若い世代に広げようと提案。「立場が違えば、互いに学ぶことがある。国内外の幅広い人々がつながり、災害から得た教訓を次世代や災害に遭っていない地域のために役立ててほしい」と話す。

（渡辺達也、加藤亮、梶彩夏が担当しました）

大川小学校の被災した校舎の前で、語り部の話に耳を傾けるシンポジウム参加者たち（宮城県石巻市で）

＊

防災について、備蓄や家具転倒防止など家庭での取り組みや工夫、地域における活動例を募集します。具体的な内容やエピソードをお寄せください。住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレスを明記し、〒100・8055読売新聞東京本社生活部「防災取材班」へ。ファクス（03・3217・9919）、メール（kurashi@yomiuri.com）でも受け付けます。

2020年3月6日（金）

読売新聞